

## 第 11 話<祖母山下宮>の要約と参考資料

### 第 11 話<祖母山下宮>の要約

南組の路傍に「<sup>おぼだけ</sup>唵婆嶽神社」の額のかかった社が建っています。地元の人には「おぼ宮」「うば宮」と呼んでいて、もとは、みそぎに使った清水を守る女性の住まいでした。やがて江戸時代に、祖母山をご神体にまつる神社の下宮となり、八方八王神の一社に数えられます。

### 第 11 話<祖母山下宮>の参考資料

#### 1 1 - 1 唵婆嶽神社の歴史

佐藤全作さんの話（1983 年 12 月 4 日聴取）

昔は、今の神社の上の段に神社があったらしい。ずい分大きい神社だと聞いている **A**。

火事で焼けたあと、その神社が下の段におろされた。カヤ葺きの社だった **B**。

私が小学 5, 6 年のころだから、昭和 12 年ごろ、道をつくるので、社を小さくして後ろに移動させた。ちょうど鉾山の長屋を建てる製材所があったので、そこに手伝ってもらい、がっちりした社を建てた **C**。

**B** と **C** の向きは同じ。南にむいて建っている。神社から見える北側の山は障子岳。古祖母山は見えない。延宝二年の神明帳では西向とある。（\***A** は、**BC** と違って、西向きに建っていた？）

田を開くとき、田のくろに昔の灯籠が投げ捨ててあったので、粗末になると考えて、宮の横に建てたが、子どもが遊ぶときに危険になるので倒して、今は寝かせている。

その灯籠に「安政乙卯歳八月建」、建てた人は「西出幸之進」と名前がはいっていた。何者かと思っていたら、私の母の本家（黒葛原）に行ったとき、たまたま古い書類や家財道具を焼いていた。木箱の引き出しに「西出幸之進」という名前が書きこんであった。母の本家は、江戸時代に鉾山の事務所になっていた家だから、鉾山の事務員のような人ではなかっただろうか。その西出が灯籠を寄進した。

（唵婆宮は谷蔵さん＝全作さんの土地に建っている）

佐藤全作さんの話（1983 年 12 月 14 日聴取）

昔は、今よりもっと上の段に神社はあった。慎市君（「中間」）の田 1 反のうち（「中」）の田 1 反のあるところに、神社があったようだ。「森の後」という地名も残っているくらいだから、よほど大きな森があったのだろう。慎市君とこの田の裏に下水があった。その下水に太いタブの木の芯が横たわっていた。この木が森に立っていた大木と思われる

る。あるとき、その下水の水がゴボゴボゴボゴボ、みんな抜けてしまった。タブが腐れて、水が抜けたのだらうという話を、健蔵さんがしていた。慎市君とこの柿（十連寺）も、森の木として植えてあったのではないか、という人もいる。

ご神体をうちに持ってきていたこともあったが、いろいろ変なことが続くので、物知りにもみてもろたら、百姓家は焚きものの火で煙が立つ。煙が嫌いで障るらしいというので、また社をつくって外にまつたと聞いている。神社がなくなった時分、私とここにご神体を持って来ていたんでしょ。

近くに「塩井のもと（しうんもと）」という場所がある。いまは田んぼになっているが、水は少しずつ湧き出ている。ここが、御幸（おみゆき）に行きよった場所。

村の人より、よそから来る人の方が、祭らないかんと言うが、今は旧9月13日にまつるのは、うち一軒だけ。旧10月10日の金毘羅さんのむら祭にお神酒をあげて、いっしょにやるようになってしまった。

#### 唵婆嶽神社の灯籠（1983年12月16日調査）

唵婆嶽神社の横に石が積んである。その中に灯籠があった。

安政乙卯歳八月建（1855年）

献燈 西出幸之進

#### 延宝貳年高千穂庄神明帳（紀元二千六百年記念「高千穂特別記録文献資料（二）所収」）

おりわら

祖母嶽大明神下宮

一、祖母宮大明神 壺間四面 右すへ 御殿

二躰 西面

彼御神、祖母嶽大明神下宮之社也。八方ニ八王神之一社也。此森山、西上、北南東下ル。立四、五十間、よこハ四十間余之宮山也。従是ハ祖母嶽山ハ西ナリ。此社前ニ土路久山川流也、此社、東上ル、西北南下ル宮山ナリ。

（\*延宝2年=1674年）

#### 延享四丁卯年十月 岩戸村神社境内書上帳

土路久村之内折原村

一、祖母大明神 祝子 八弥

本社 壺間四面 境内 豎三十貳間 横二十六間

右 祭礼九月十三日 神楽ニ而成就任候

神社書上 日向臼杵郡延岡領高千穂 岩戸村神主 佐藤参河正信

岩戸村土路久

一、祖母宮大明神

所祭神 日子穂々出見命、豊玉姫命  
勸請年月 不詳  
社 竪二間 横二間半  
境内山林 竪参拾弍間 横弍拾六間 代々御領主除地  
祭日 九月十三日神楽

慶応四戊辰年六月 神社書上帳（日向国臼杵郡高千穂社家配当田尻弾正）

岩戸村土路久

一、祖母宮大明神

所祭神 祖母嶽下宮、日子穂々出見命、豊玉姫命  
本社 竪一間 横一間  
境内 竪三十二間 横二十六間  
勸請年月 不詳 祭礼 九月十三日

11-2 をば宮、うば宮について

折口信夫「七夕祭りの話」（折口信夫全集第15巻所収；P181~182）

村里が、海辺から山地へ這入って行くに従って、すっかり様子を変へて、山の水と関係を結ばなければならなくなりました。以前は、海岸又は川のくまで女を隔離して据ゑて置いたのが、山野の中に据ゑる様になりました。これが後世の齋宮の野の宮の根元らしいのです。此、野の宮の生活では、水の事は訣（わか）りませんが、とにかく山野に隔離しました。それが次第に山深く住まわせる様になり、さうして其処に住む女性は、神聖な山の水の番をして居て、或時期にその水を「みそぎ」に使って、人々を潔めたのであります。此女性を、昔から「おも」又は「をば」と言って居りましたが、「をば」が段々と変化して来て、「うば」となったのであります。（略）親しい人ならば「うば」と言ふ習慣から、この「みそぎ」をする女性をも「うば」と言ひ、そして山に住んで居るので「山うば」と言ふ様になったのでありまして、決して老女ばかりを指すのだとは考えられないのであります。

（\*折口信夫の説でいくと、をば=水中からくる神を迎えてみそぎをする女性のことで、人の住む里が、海岸から山中へ入るに従って、みそぎに使う山の水を守る女性が必要になり、その女性を隔離してすえおく野の宮ができた。この野の宮=をば宮（姥宮）、すなわち山姥の住まいということではないか。みそぎに使った水が、もちろん「塩井のもと」の塩井である）

1 1 - 3 八方八王神

延宝二年高千穂庄神明帳

彼祖母嶽大明神之下宮、八方ニ八王神ト奉申有之也。

内壹社ハ 御領内五ヶ所祖母宮

壹社ハ 御領内上之村祖母宮

壹社ハ 御領内岩戸折原祖母宮

壹社ハ 御領内岩戸阿蘇原祖母宮

壹社ハ 肥後長野祖母宮

壹社ハ 豊後川原祖母宮

壹社ハ 豊後奥嶽祖母宮

壹社ハ 豊後尾平祖母宮

八社ハ下宮也

但、古ハ御領上之村ノ奥ニ坊中御座候由申候也（檜原東福寺真相坊）

（\*川原祖母宮は神原こうばるの誤り）